

仏説観普賢菩薩行法經

(普賢菩薩とその行法に思いを致す方法について仏が説かれた教え)

(406 頁 2 行～418 頁 4 行目)

無量世に於て、眼根の因縁をもって諸色に貧著す。色に著するを以ての故に諸塵に貧愛す。塵を愛するを以ての故に女人の身を受けて、世々に生ずる処に諸色に惑著す。色汝が眼を壊つて恩愛の奴となる。故に色汝をして三界を経歴せしむ。此の弊使を為て盲にして見る所なし。今大乘方等經典を誦す。此の經の中に十方の諸仏色身滅せずと説く。汝今見ることを得つ、審実にして爾りや不や。眼根不善汝を傷害すること多し。我が語に随順して、諸仏・釈迦牟尼仏に帰向したてまつり、汝が眼根の所有の罪咎を説け。諸仏・菩薩の慧眼の法水、願わくは以て洗除して、我をして清浄ならしめたまへと。

(一部經：406 頁 2 行目～8 行目)

数えきれない程の無数の世に於いて、視覚の感覚機能は、様々な形あるものに対する渴望を引き起こしてきました。形あるものに執着するから様々な欲望の対象を貪り愛するようになります。様々な欲望の対象に愛着するからこそ、女性の胎内で身体を受けることになり、何度も何度も生を受けて様々な形あるものに執着し続けるのです。形あるものは貴方の眼を汚し、貴方を愛欲の奴隷にしてしまうのです。そうして、形あるものは貴方を欲望の奴隷にし、三つの世界を彷徨わせるのです。そのような障害は貴方がものごとをありのままに見えない状態にしてしまうのです。

今こそ、全てのものを悟りへと導く大乘經を心に誦えなさい。これらの經典では、十方の仏の現れた姿は消えて無くなることはないと言われています。今や自分でそれが本当かどうかを確認することができましょう。視覚感覚の機能不全は大いなる害悪をもたらします。私の言葉に従って、諸仏と釈迦牟尼仏を抛り所にし、自分の視覚機能の不純さや欠陥について次のように言いなさい。「仏・菩薩の奥深い智慧の法水によって私は清められて清浄になる事が出来ますように」と。

是の語を作し已つて遍く十方の仏を礼し、釈迦牟尼仏・大乘經典に向いたてまつりて、復是の言を説け。我が今懺する所の眼根の重罪、障蔽穢濁にして盲にして見る所無し。願わくは仏大慈をもって哀愍覆護したまえ。普賢菩薩大法船に乗って、普く一切の十方無量の諸の菩薩の伴を渡したもう。唯願わくは哀愍して我が眼根の不善業障を悔過する法を聴したまえ。(一部經：406 頁 9 行目～407 頁 3 行目)

この言葉を言い終え、広く十方の仏を礼拝し、釈迦牟尼仏と大乘經典に心を向けて、またこのように言いなさい。「私は今、ひどい不純物が私の視覚を妨げ、覆い、汚し、曇らせていることを認識しました：私は真実が見えなくなり、知ることができません。仏様が

いなる慈悲と慈愛をもって、私を導いて下さいますように。普賢菩薩は、十方の無数の様々な菩薩を伴い、大いなる教えの船に乗って皆を悟りの境地へと導かれます。私への憐れみと同情から、どうか視覚という感覚器官の不健全で有害な足かせを取り除く為の私の反省と克服の修行を見届けて頂きご指導下さい。」

是の如く三び説いて五体を地に投じて、大乘を正念して心に忘捨せざれ。是れを眼根の罪を懺悔する法と名く。

諸仏の名を称し焼香・散華して、大乘の意を發し・・・旛・蓋を懸けて、眼の過患を説き罪を懺悔せば、此の人現世に釈迦牟尼仏を見たてまつり、及び分身・無量の諸仏を見たてまつり、阿僧祇劫に惡道に墮ちじ。大乘の力の故に、大乘の願の故に、恒に一切の陀羅尼菩薩と共に眷属と為らん。是の念を作す者は是れを正念とす。若し他念する者を名けて邪念とす。是れを眼根初境界の相と名く。

眼根を淨むること已って、復更に大乘經典を讀誦し、昼夜六時に胡跪し懺悔して是の言を作せ、我今云何ぞ但釈迦牟尼仏・分身の諸仏を見たてまつりて、多宝仏の塔全身の舍利を見たてまつらざる。多宝仏の塔は恒に在して滅したまわず。我濁惡の眼なり、是の故に見たてまつらず。是の語を作し已って、復更に懺悔せよ。

(一部經：407 頁 3 行目～408 頁 3 行目)

このように三回言って、両ひざと両ひじを地に着けてひれ伏し、さらに合掌して頭を地につけ、すべての人々と共に悟りへと歩むことを心に念じて、それを決して忘れたり諦めたりしないようにしなければなりません。これが視覚の感覚器官の不純さを自分で反省し克服する為の修行と呼ばれます。

諸々の仏の名を呼び、焼香し華をまいて仏に供養して、すべての人々との共に悟りへと歩むことを決意し、絹ののぼり旗と傘を掛けて、自らの眼の過ちと迷妄を告白して、それを反省して克服する修行を実行する者は、その身のままで釈迦牟尼仏とその無数の分身を観ることができるでしょうし、限りなく長い長い年月の間、苦しみの世界に住する事は無くなるでしょう。全ての人々と共に悟りへ歩むことへの決意とその力によって、そのような人は、全ての教えをしっかりと記憶する力を持った菩薩達の仲間となり常に一緒にいることができるでしょう。このような正しい心構えを維持する心の動きを正念と言い、他の心の動きをすることを邪念と言います。これを視覚の感覚機能に関する第1段階の条件と言います。

視覚の感覚機能を清め終わった後に、修行者はまた更に大乘經典を暗唱し唱え、昼夜六回、姿勢を正してひざまづき、自らを反省し正さなければなりません。そして、更に次の様に言わなければなりません。「私は今なぜ釈迦牟尼仏とその分身の諸仏だけが見えて、多宝仏塔の全身の遺骨を見ることができないのでしょうか？多宝仏塔は常に現存しているし、存在しなくなることはありません。私の眼がまだ不完全で損なわれているからです。」と。これらの言葉を言い終わって、修行者は更に自らを反省し正さなければなりません。

七日を過ぎ已って、多宝仏の塔地より涌出したまわん。釈迦牟尼仏即ち右の手を以て其の塔の戸を開きたまわん。多宝仏を見たとまつれば普賢色身三昧に入りたまえり。一一の毛孔より恒河沙微塵数の光明を流出したもう。一一の光明に一一に百千万億の化仏います。此の相現ずる時、行者歡喜して讃偈をもって塔を遶らん。七口を満て已りなば、多宝如来大音声を出して、讃めて言わく、法の子、汝今真実に能く大乘を行じ、普賢に随順して眼根懺悔す。是の因縁を以て、我汝が所に至って汝が証明と為る。

是の語を説き已って、讃めて言わく、善哉善哉、釈迦牟尼仏、能く大法を説き大法の雨を雨らして、濁惡の諸の衆生等を成就したもう。

(一部經：408 頁 4 行目～408 頁 12 行目)

七日を過ぎた後、多宝仏塔は、大地から涌出するでしょう。そうすると釈迦牟尼仏は右手で塔の扉を開けます。そこには、多宝仏があらゆる衆生に応じた姿となる精神集中の状態にある姿が見えます。毛穴一つ一つからガンジス川の砂の数に等しい程の無数の明るい光明が輝き放たれ、一つ一つの光明には百千万億の様々な姿に変化した無数の仏の姿が見えます。このような状態が見えると修行者は嬉しくなって詩を唱えて讃嘆しながら塔の周りを巡ります。そうして7回巡り終わると、多宝仏は大音声を出して法の後継者を賛めて次の様に言われます。「今や貴方は本当に大乘の教えの通りに行じる事ができていて、普賢菩薩に従って、視覚の感覚機能を改めて正す修行を成し遂げています。そのような行の結果として、私は貴方の所に来て貴方が正しく行じていることを証明するのです。」

このように、言い終えると次のように賛えて言うでしょう。「釈迦牟尼仏よ！良くぞ、成し遂げました！貴方は偉大なる教えを巧みに説き、大いなる教えの雨を降らして、様々に混乱している衆生を正しい気づきへと導きました。」

是の時に行者、多宝仏塔を見已って、復普賢菩薩の所に至って、合掌し敬礼して白して言さく、大師、我に悔過を教えたまえ。

普賢復言わく、汝多劫の中に於て、耳根の因縁をもって外声に随逐して、妙音を聞く時は心に惑著を生じ、惡声を聞く時は百八種の煩惱の賊害を起す。此の如き惡耳の報惡事を得。恒に惡声を聞いて諸の攀縁を生ず。顛倒して聴くが故に、当に惡道・辺地・邪見の法を聞かざる処に墮すべし。

汝今日に於て大乘の功德海蔵を誦持す。是の因縁を以ての故に十方の仏を見たとまつる。多宝仏塔は現じて汝が証と為りたもう。

汝自ら当に己が過惡を説いて諸罪を懺悔すべし。是の時行者、是の語を聞き已って、復更に合掌して五体を地に投じて是の言を作せ、(一部經：408 頁 12 行目～409 頁 10 行目)

この時に、修行者は、多宝仏の塔を見た後、また、普賢菩薩の所に至り、合掌し敬って礼拝して言います。「大師よ、私に過ちを反省し正す方法を教えてください。」

普賢菩薩は、応えて言います。「きわめて長い間、あなたの聴覚機能は、外から聞こえてくる音に従いそれを追いかけるようにしてきました。心地よい声を聞くと夢中になって虜

になってしまいます。悪意ある声を聞くと、百八種の煩惱が湧き起り害をなします。そのような穢れた聴覚機能によって悪い状況がもたらされ、常に悪意ある声を聞くことは様々な雑念を引き起こすことになります。真実を素直に聞けないことで、苦しみの境遇や誤った考えが蔓延る所、あるいは正しい教えが聞けない状況に陥るのです。

貴方は今こそ、良き影響力を大海のように備える大乘の教えを自分のものとして保持すべきです。そうすることで、十方に仏を見ることができるようでしょう。多宝仏の塔も現れて（貴方が正しく法華經を行じている事を）認証してくださるでしょう。

従って、貴方は自身の誤りや落ち度を自ら認め、行いを正していくべきなのです。」と。このように聞き終わったら、修行者は再度合掌して五体を地に投じて以下の様に言うべきです。

正遍知世尊、現じて我が証と為りたまえ。方等經典は為れ慈悲の主なり。唯願わくは我を觀我が所説を聴きたまえ。

我多劫より乃至今身まで、耳根の因縁をもって声を聞いて惑著すること、膠の艸に著くが如し。諸の悪声を聞く時は煩惱の毒を起し、処処に惑著して暫くも停まる時なし。此の弊声を出して我が識神を勞し、三塗に墜墮せしむ。今始めて覚知して、諸の世尊に向いたてまつりて發露懺悔すと。

既に懺悔し已って、多宝仏の大光明を放ちたもうを見たてまつらん。其の光金色にして遍く東方及び十方界を照らしたもう。無量の諸仏身真金の色なり。東方の空中に是の唱言を作す、

（一部經：409 頁 11 行目～410 頁 6 行目）

「正しく普遍的な智慧を具えられた世尊よ、どうか現れて、全てを等しく包み込む經典が慈しみと憐れみを源であることを、証明してください。どうか私を觀て私の言う事をお聞きください。

今の生存に至るまでの長い長い年月の間、私の聴覚機能は、私に妄想を起こさせ、藁に膠がくっつくように、様々な音声に執着するようにさせてきました。私が不健全な音声聞く度に、妄想を産み出す世俗的な熱情の毒が湧き起り、それによって、私は幻惑されて絶え間なくあらゆる所に執着してしまうのです。そのよううわべだけの音声に囲まれることで、私の心は疲弊してしまい、三つの不健全な領域に落ち込んでしまうのです。今回、初めて私はそのように気づくことが出来ました。私はその事を認め自らを正すために世尊にお目に掛かりたいのです。」と。

そのようにして、懺悔を（自分を正す誓いを立てて実践する事）すると、修行者は、多宝仏が素晴らしい金色の光を発するのを見るでしょう。東方の全ての地域を照らし、同様に、十方の全ての地域にまで行き渡り、純金の色に輝く体を持つ無数の諸仏を照らし出します。東方の空には、これらの言葉が豊かに響き渡ります。

此に仏世尊まします、号を善徳という。亦無数の分身の諸仏あり、宝樹下の師子座上に坐して結跏趺坐したまえり。是の諸の世尊の一切皆普賢色身三昧に入りたまえる、皆是の言を作して、讃めて言わく、善哉善哉、善男子、汝今大乘經典を讀誦す。汝が誦する所は是れ仏の境界なり。(一部經：410 頁 6 行目～410 頁 10 行目)

ここに仏、世尊がいらっしゃいます。名を善徳といいます。また、無数の分身の諸々の仏がいらっしゃいます。宝石の樹の下に獅子座に座り結跏趺坐していらっしゃいます。この諸々の世尊の全てが皆、あらゆる衆生に応じた姿となる精神集中の状態にある姿が見えます。そして皆このように言って、褒め讃えました。「よく言った、よく言った。良き志を持つ者よ。貴方は今、大乘經典を讀み自分の心の中に取り入れました。貴方が心に取り入れたものこそ正に仏の境涯なのです。」

是の語を説き已りなば、普賢菩薩復更に為に懺悔の法を説かん。

汝先世に無量劫の中に於て、香を貪るを以ての故に、分別諸識処々に貧著して、生死に墮落せり。汝今应当に大乘の因を觀ずべし。大乘の因とは諸法実相なりと。

是の語を聞き已って、五体を地に投じて復更に懺悔せよ。既に懺悔し已って当に是の語を作すべし、南無釈迦牟尼仏・南無多宝仏塔・南無十方釈迦牟尼仏分身諸仏と。

是の語を作し已って、遍く十方の仏を礼したてまつれ、南無東方善徳仏及び分身諸仏と。眼に見る所の如くして一一に心をもって礼し、香華をもって供養し、供養すること畢つて胡跪し、合掌して、種々の偈を以て諸仏を讃歎したてまつり既に讃歎し已って、十悪業を説いて諸罪を懺悔せよ。既に懺悔し已って是の言を作せ、

(一部經：410 頁 10 行目～411 頁 8 行目)

このように言い終わると、普賢菩薩は更に修行者の為に、自身の誤りや落ち度を自ら認め、行いを正していく方法を説くでしょう。

数えきれない程の無数の前の世に於いて、香りに貪り執着することによって、幾つもの識別作用が様々なものに貪り執着させます。それによって生死の世界に墮落するのです。今まさに、大乘の根本に思いをはせるべきです。大乘の根本とは、あらゆる現象の真実の姿のことです。

このような言葉を聞き終えたら、両ひざと両ひじを地に着けてひれ伏し、さらに合掌して頭を地につけて、もう一度改めて自身の誤りや落ち度を自ら認め、行いを正していく事を誓うべきです。行いを正していく事を誓い終わったら、次の様に言いなさい。「釈迦牟尼仏に心から帰依いたします。多宝仏塔に心から帰依いたします。十方にいらっしゃる釈迦牟尼仏の分身である諸仏に心から帰依いたします」と。

このように言い終わって、広く十方の仏に礼拝しなさい。「東方の善徳仏、及び分身の諸仏に、心から帰依いたします」と。まるで眼で見るように、一人一人に心をこめて礼拝し、香と華によって供養し、供養することが終わって、ひざまずいて、合掌して、種々の詩によって、諸々の仏を賛嘆し、既に賛嘆し終わって、十の悪い影響を及ぼす業(殺生・偷盜・邪

淫・妄語・綺語・悪口・両舌・貪欲・瞋恚・邪見)について語り、自分の誤った行いを自ら改めていきます。自分の過ちを正し終えたのちに、修行者は次のように語るのです。

我先世無量劫の時に於て、香・味・触を貪って衆悪を造作せり。是の因縁を以て、無量世より来恒に地獄・餓鬼・畜生・辺地・邪見の諸の不善の身を受く。此の如き悪業を今日発露し、諸仏正法の王に帰向したてまつりて説罪懺悔すと。

既に懺悔し已って身心懈らずして復更に大乘經典を読誦せよ。大乘の力の故に空中に声あつて告げて言わく、法の子、汝今应当に十方の仏に向いたてまつりて大乘の法を讃説し、諸仏の前に於て自ら己が過を説くべし。諸仏如来は是れ汝が慈父なり。汝当に自ら舌根の所作の不善悪業を説くべし。此の舌根は悪業の想に動ぜられて、妄言綺語・悪口両舌・誹謗妄語、邪見の語を讃歎し、無益の語を説く。是の如き衆多の諸の雑悪業、闕違壊乱し法を非法と説く。是の如き衆罪を今悉く懺悔すと。(411 頁 8 行目～412 頁 5 行目)

「私は、先の世の無量劫という長い時間に於いて、香り、味、触感を貪って多くの過ちを生じさせました。このような因と縁によって、計り知れない長い間、常に地獄・餓鬼・畜生など正しい教えから遠く離れた様々な好ましくない状態におかれ続けました。私は今日これらの悪い影響のある行いを告白し、正しい教えの王である諸々の仏に向きあつて、自らの心の汚れを認め、自分自身の行いを改めて行きます。」

自らを改めることを誓い終わった後、修行者は、また更に大乘經典を心身ともに怠けることなく心に唱えなさい。大乘の力によって、空中に声がして、法の後継者に対して次の様に宣言するでしょう。貴方は今こそ十方の仏に向かって大乘を讃嘆すべきです。諸々の仏の前で自らの過ちを語りなさい。諸々の仏と如来は、貴方にとっては慈悲深い父親です。貴方は自らの舌によって引き起こした邪悪で悪い影響を及ぼす行いを告白しなければなりません。「この舌とその能力は、過去からの悪い行いの影響による想いに動かされて、嘘、お世辞、卑下する言葉、二枚舌、誹謗、中傷、間違った考えを褒めたり、無駄な言葉を使ったりします。このような多種多様な悪い影響を及ぼす行為によって、対立と混乱を引き起こし、正しい法を正しくない法だと言い張るのです。私は今、これらすべての過ちを反省し心から改める事を誓います。」と。

諸の世雄の前にして是の語を作し已って、五体を地に投じて遍く十方の仏を礼したてまつり、合掌長跪して当に是の語を作すべし、此の舌の過患無量無辺なり。諸の悪業の刺は舌根より出ず。正法輪を断ずること此の舌より起る。此の如き悪舌は功德の種を断ず。非義の中に於て多端に強いて説き、邪見を讃歎すること火に薪を益すが如し。猶お猛火の衆生を傷害するが如し。毒を飲める者の瘡疣なくして死するが如し。是の如き罪報悪邪不善にして、当に悪道に墮すること百劫千劫なるべし。妄語を以ての故に大地獄に墮す。我今南方の諸仏に帰向したてまつりて、過罪を発露せん。(412 頁 6 行目～413 頁 1 行目)

世界の英雄の前でこの言葉を唱えた後、修行者は地面に身を投じ、十方の仏に万遍なく

敬意を表しなさい。そして、両膝を立て、手のひらを合わせ、次のように言うのです。「この舌の煩惱と過ちは無数であり、無限です。禍根の棘はこの舌による言葉の働きから生じるのです。正しい法話から離れることも、この舌から始まり、このような悪口を言う舌は、有益な影響力の種をも破壊します。無意味なことを力説し、間違った考えを褒め称えるのは、火に薪を益すように、激しい炎が衆生を傷つけ害する如くです。それはまるで、症状が出ないまま毒によって死に至る者の様です。これらすべての過ちがもたらす、有害で、悪意のある邪な良くない行いによって、百劫、千劫の間、苦しい境地に陥るのです。嘘の言葉によって、私は大地獄に堕ちるのです。私は今、諸仏に帰依し、私の重大な過ちを告白致します！」。

是の念を作す時空中に声あらん。

南方に仏います、栴檀徳と名けたてまつる。彼の仏に亦無量の分身います、一切の諸仏皆大乘を説いて罪惡の除滅したもう。此の如き衆罪を、今十方無量の諸仏大悲世尊に向いたてまつりて、黒惡を發露し誠心に懺悔せよ。

是の語を説き已りなば、五体を地に投じて復諸仏を礼したてまつれ。

是の時に諸仏、復光明を放って行者の身を照らして、其の身心をして自然に歡喜せしめ、大慈悲を發し普く一切を念ぜしめん。爾の時に諸仏、廣く行者の為に大慈悲及び喜捨の法を説き、亦愛語を教え六和敬を修せしめん。爾の時に行者、此の教勅を聞き已って心大に歡喜して、復更に誦習して終に懈怠せざらん。

(413 頁 2 行目～413 頁 11 行目)

この様に念じると空中に声が聞こえ来ます。

「南の方角に白檀の徳という仏がいます。この仏から更に無数の仏が發現し、そのすべてが迷妄と過ちを破壊し除去する大乘の教えを説いています。自分自身の迷妄については、十方の無数の仏、すなわち慈悲深い世尊と向き合い、自らの重大な過ちを認め、心から自分を改めなさい。」

この様に言われたら、修行者は地面に身を投じ、また諸仏を礼拝しなさい。

この時、諸仏は明るい光線を發して修行者の体を照らし、修行者は自然と心身ともに喜び、万物に思いを馳せ、大きな慈悲を生み出します。そして、諸仏は修行者のために大いなる慈悲と分かち合いの教えなどを詳しく説き、そして、修行者が優しい言葉を使うことを教え、身・口・意・戒・見・行の六つの点でお互いに敬い和合することを習得させるのです。これらの教えと指導とを聞くと、修行者の心は喜びでいっぱいになり、怠ることなく、それらを完全に自分のものにし、習得することができるのです。

空中に復微妙の音声あつて、是の如き言を出さん、汝今应当に身心に懺悔すべし。

身とは殺・盜・淫、心とは諸の不善を念ずる、十惡業及び五無間を造ること、猶お猿猴の如く亦鰻膠の如く、處處に貧著して遍く一切六情根の中に至る。此の六根の業、枝條華葉悉く三界・二十五有・一切の生処に満てり。亦能く無明・老・死・十二の苦事を増長

す。八邪・八難中に経ざることなし。汝今应当に是の如き惡不善の業を懺悔すべし。

(413 頁 11 行目～414 頁 5 行目)

空中に、また何ともいえない美しい声がして、このように言います。貴方は、今こそ身も心も行いを反省し改めなさい。

身は殺生・盗み・淫行を行い、心は様々な善くない事を思い描き、殺生・偷盗・邪淫・妄語・綺語・惡口・兩舌・貪欲・瞋恚・邪見の十の悪い行為と、無間地獄へ墮ちる五つの罪（母を殺すこと、父を殺すこと、阿羅漢を殺すこと、僧の和合を破ること、仏身を傷つけること）を生み出します。それらは、しかも、あたかも猿のように、又、とりもちのように、あちらこちらに執着して、六つの感覚器官の中に深く遍く浸透します。そしてそれら六つの感覚器官が生み出す行いの影響力は、枝から小枝へ更に花や葉として、三つの世界の 25 種類の存在の仕方の生を享ける全ての場所に行き渡り、苦しみを生み出す無知・老死など 12 の要因を助長するように働きます。そして、八つのよこしまな行い（邪見、邪思惟、邪語、邪業、邪命、邪方便、邪念、邪定）や、正法を聞くことを妨げる八種の苦難（地獄・畜生・餓鬼・長寿天・盲聾瘡啞(もうろういんあ)・辺地・世智弁聰(せちべんそう)・仏前仏後)の中を経過させてしまうのです。貴方は、このような良くない、有害な影響力を生み出してきたことを、今こそ、反省し改めるよう決意しなければなりません。

爾の時に行者、此の語を聞き已って、空中の声に問いたてまつる、我今何れの処にしてか懺悔の法を行ぜんと。

時に空中の声即ち是の語を説かん、釈迦牟尼仏を毘盧遮那遍一切処と名けたてまつる。其の仏の住処を常寂光と名く。常波羅蜜に摂成せられたる処、我波羅蜜に安立せられたる処、淨波羅蜜の有相を滅せる処、樂波羅蜜の身心の相に住せざる処、有無の諸法の相を見ざる処、如寂解脱・乃至般若波羅蜜なり。是の色常住の法なるが故に。是の如く应当に十方の仏を觀じたてまつるべし。(一部經：414 頁 5 行目～414 頁 12 行目)

その時に修行者はこの言葉を聞いて、空中の声に尋ねます。「私は今、どのような場所で自分を改める修行を实践すればよいのでしょうか？」

すると、すぐに空中から声が返ってきて、こう言うでしょう。「釈迦牟尼仏は、あらゆるところに偏在されている方とされています。この仏の居られる処は、永遠の静寂の光と呼ばれ、そこは時間を超えた永遠性が完成され、自他の分別を超えた認識主觀が完成され、あらゆる妄想が滅した浄らかさが完成されており、もはや心や身体の違いもあらゆる苦しみも超越している状態が完成されており、自他分別により生じる物事の有無の姿は消え去り、悟りによる静寂と智慧が完成された処なのです。これらの在り方が常に存在している状態であるので、その様なものとして十方の仏を觀ずるべきなのです。

時に十方の仏、各右の手を申べて行者の頭を摩でて、是の如き言を作したまわん。

善哉善哉、善男子、汝今大乘經を讀誦するが故に十方の諸仏懺悔の法を説きたもう。普

薩の所行の結使を断ぜず使海に住せず。心を観ずるに心なし、顛倒の想より起る。此の如き相の心は妄想より起る。空中の風の依止する処なきが如し。是の如き法相は生ぜず没せず。何者か是れ罪、何者か是れ福、我が心自ら空なれば罪・福も主なし。一切の法は是の如く住なく壊なし。是の如き懺悔は心を観ずるに心なし。法も法の中に住せず。

諸法は解脱なり、滅諦なり、寂靜なり。是の如き相をば大懺悔と名け、大莊嚴懺悔と名け、無罪相懺悔と名け、破壊心識と名く。此の懺悔を行ずる者は、身心清浄にして法の中に住せざること、猶お流水の如し。念念の中に普賢菩薩及び十方の仏を見たてまつること得ん。

(一部經：415頁1行目～415頁11行目)

その時に十方の仏は、それぞれ右の手を伸ばして、修行者の頭をなでて、このように言われます。

「よろしい。よろしい。良き志を持つ者よ。貴方は今大乘經典を心から読誦したが故に、十方の諸々の仏は、自分を反省して改める方法を説かれたのです。菩薩が行うべき修行は、煩惱を絶ち切ることもなく、迷いの海に留まることもない。心をよく観察すれば心と呼べるものは存在しないことが分かります。眞実を知らない事によって概念化作用が起こり、それによって起こる妄想が心というものを生起させるのです。空中の風には抛り所が無いように、このような現象の諸相は生じる事もなく滅する事ありません。罪とは何か？福とは何か？自分の心自体が空でありそれ自体の実体が無いものだから、罪も福もそれを所有する者は居ないのです。全ての現象はこれと同様なのです。全ては留まる事もなく壊れることもないのです。この様に自分自身を反省し改めなさい。心だと思っているものを良く観察してそれが存在しないことを熟視しなさい。存在するものも存在自体の中には無いのです。

すべての現象は、解脱、苦悩消滅の眞理、完全な静寂のままなのです。物事をこのように捉える事こそが究極的に自分を反省し改める事と言われ、自分を反省し改める事が完成された状態と言われ、罪の意識からも自由に成った状態で自分を反省し改める事と言われ、心や意識というものの区別も打ち破られ状態であると言われるのです。このように自分を反省し改める者は身も心も清らかであり物事に囚われる事なく流れる水の様です。そのような者は、いつも普賢菩薩と十方の仏を見ることができでしょう。

時に諸の世尊、大悲光明を以て行者の為に無相の法を説きたもう。行者、第一義空を説きたもうを聞きたてまつらん。行者聞き已って心驚怖せず。時に応じて即ち菩薩の正位に入らん。仏、阿難に告げたまわく、是の如く行ずるをば名けて懺悔とす。此の懺悔とは十方の諸仏・諸大菩薩の所行の懺悔の法なり。

仏、阿難に告げたまわく、仏の滅度の後、仏の諸の弟子若し悪不善業を懺悔することあらば、但當に大乘經典を読誦すべし。

此の方等經は是れ諸仏の眼なり。諸仏は是れに因って五眼を具することを得たまえり。仏の三種の身は方等より生ず。是れ大法印なり、涅槃の海を印す。

此の如き海中より能く三種の仏の清浄の身を生ず。此の三種の身は人天の福田、応供の中の最なり。其れ大乘方等經典を誦読することあらば、当に知るべし、此の人は仏の功德を具し、諸悪永く滅して仏慧より生ずるなり。

爾の時に世尊、而も偈を説いて言わく

(一部経：415頁11行目～416頁10行目)

その時に、諸々の世尊は、修行者の為に、大きな慈悲の光明を照らして、無相の法をお説きになります。修行者は、究極の真理である空を説かれるのを聞くことができるのです。修行者はそれを聞き終えても心に驚きや恐れが生じることもなく、相応しい時期に本當の菩薩としての地位に到達するでしょう。

仏は、阿難に告げられました。このように修行することを、自分を反省し改める事と言うのです。これは十方の諸々の仏や諸々の偉大な菩薩が行じた方法なのです。仏は、阿難に告げられました。仏がこの世を去った後、仏の諸々の弟子が、もしも、悪や不善の行いの罪を告白して反省して改める事があるならば、ただひたすらに大乘經典を自分のものとして一心に唱えるべきです。

この全てのものに対する平等な教えは、諸々の仏の眼なのです。諸々の仏はこれによって、肉現（人間の持つ眼）天眼（天人の持つ眼）慧眼（声聞辟支佛の持つ眼）法眼（菩薩の持つ眼）仏眼（仏の持つ眼）の五眼を得られたのです。仏が持つ法身、応身、報身の三種類の姿は、この全てのものに対する平等の教えから生じるのです。これは仏の教えが真実であることを示す印であり証明なのです。広大な海のような智慧を完成した悟りの境地の不変の証明なのです。

このような広大で深い智慧の海の中から、巧みに三種の仏の清浄な姿が生じるのです。この三種類の仏の姿は、人間や天人にとって幸福をもたらす源泉であり、供養を受けるのに最もふさわしいものです。もしも、この全てのものに対する平等な教えである大乘經典を自分のものとして一心に唱えるならば、この人は仏の良き影響力を具え、諸々の悪を永久に消滅して、仏の智慧と共に生きる事ができることを知るべきです。

その時に世尊は、さらに詩を以って次のように説かれました。

若し眼根の悪あつて 業障の眼不浄ならば 但當に大乘を誦し
第一義を思念すべし 是れを眼を懺悔して 諸の不善業を尽くすと名く
耳根は乱声を聞いて 和合の義を壊乱す 是れに由つて狂心を起すこと
猶お痴なる猿猴の如し 但當に大乘を誦し 法の空無相を觀ずべし
永く一切の悪を尽して 天耳をもって十方を聞かん
鼻根は諸香に著して 染に随つて諸の触を起す 此の如き狂惑の鼻
染に随つて諸塵を生ず 若し大乘經を誦し 法の如實際を觀ぜば
永く諸の惡業を離れて 後世に復生ぜじ
舌根は五種の 惡口の不善業を起す 若し自ら調順せんと欲せば

勤めて慈悲を修し 法の真寂の義を思うて 諸の分別の想なかるべし

心根は猿猴の如くにして 暫くも停まる時あることなし

若し折伏せんと欲せば 当に勤めて大乘を誦し 仏の大覺身

力無畏の所成を念じたてまつるべし

身は為れ機関の主 塵の風に随って転ずるが如し 六賊中に遊戲して

自在に・碍なし 若し此の悪を滅して 永く諸の塵勞を離れ

常に涅槃の城に処し 安樂にして心憺泊ならんと欲せば 当に大乘經を誦して

諸の菩薩の母を念ずべし

無量の勝方便は 実相を思うに従って得 此の如き等の六法を 名けて六情根とす

一切の業障海は 皆妄想より生ず 若し懺悔せんと欲せば 端坐して実相を思え

衆罪は霜露の如し 慧日能く消除す 是の故に至心に六情根を懺悔すべし

(416 頁行目～418 頁 4 行目)

過去からの行いの積み重ねによって不純になって、視覚機能が汚れている時は、一心に大乘經を讀誦して、究極の理法について思いを致せ。これを過去からの行いの有害な影響に終止符を打つために、物の見方を改めることと言う。

聴覚機能は、様々な否定的な声に耳を傾け、調和の心をかき乱す。このような混乱が生ずるが故に、まるで愚かな猿のように狂ったような心境になってしまう。一心に大乘經を讀誦して（自分の思い込みに気づき）物事は本来は空で無相であることに思いを致せ。（そうすれば）末永く否定的な気持ちから解放されて、天（にも通じる）耳をもって（十の方向からの）、色んな人の意見を冷静に聞くことができるでしょう。

嗅覚機能はさまざまな香りに執着し、その影響によって接触へと貴方を駆り立てる。鼻はこのように狂って誘惑される。そして、その影響によって不純な知覚を生み出すのです。大乘經を讀誦して、全ての物事の真の本質に思いを致せ。（そうすれば）末永く、様々な浅はかな行いから離れることができ、後の世においても（それらを）再び繰り返すことはないでしょう。

言語機能は、五種類の誤った物の見方を称賛するなどの否定的な行いとその影響を残してしまう。もし自分自身を統御しようと欲するならば、慈悲の心を育むよう懸命に努力し、あらゆる現象の静寂なる真の姿には分け隔ての相が無いことに思いを致せ。

心の機能は、まさに猿のように、一瞬たりともじっとしていることはない。もしそれを統御しようと欲するならば、懸命に大乘經を讀誦せよ。仏が成就された偉大なる悟った姿、力、恐れのないことに思い致せ。

身体は行為の担い手である。風に煽られた塵のようにぐるぐる回りながら、その中で六人の謀反人（六根）が制御されずにとどまる所がない。もし、このような劣悪な状態に終止符を打ち、心を圧倒する欲望から末永く袂を分かち、涅槃の城郭に住して、心を静かに、清浄にしたければ、ひらすらに大乘經を讀誦し、菩薩を生み出す拠

り所（母）に心を向けよ。

限りなく勝れた方便（を使う智慧）は、物事の真の姿を思うことによって得ることができる。これら六つの方法が六つの感覚機能を統御するものと呼ばれる。

大海のようなあらゆる迷いの世界は、すべて妄想によって作りだされる。もし、自分自身のそれら（の感覚機能）を正そうと欲するならば、まっすぐに正しく座って、すべての物事の真の姿に思いを致せ。（そうすれば）あらゆる不純なものは、霜や露のように、智慧の太陽の下で速かに消え去るだろう。だから、誠心誠意を尽くして、六つの感覚機能を正す行いを実行せよ。